

携帯電話・インターネットに関わる意識調査のまとめ（概略）

調査対象 函館市及び近郊3町の13校の小・中学校の児童・生徒及びその保護者 計921家庭

調査時期 平成16年12月

回収率 小学校(児童63%、保護者72%)、中学校(生徒59%、保護者55%)

1. 携帯電話

携帯の所有については、学年が進むにつれて増えている。中学3年で女子は半数、男子は3割の所有となっている。(グラフ1)

携帯の利用にあたって、子どもとした約束では、利用料金についてが、中学生で9割近い。利用内容についても、中学生において、親の配慮をうかがうことができる。(グラフ2)

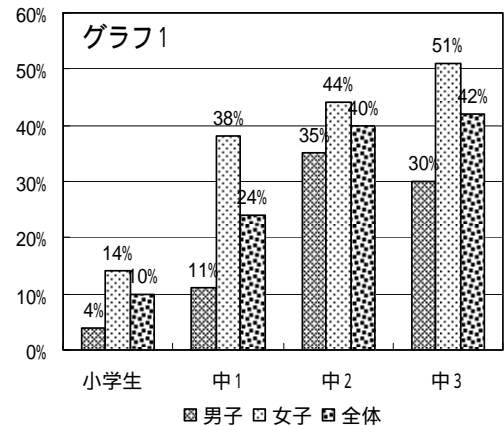
通話料金では、小学生は親との連絡が主であり、基本料金に近い3000円以内の割合が多い。中学生は、分布が大きく広がった。中学生では学割などの割引サービスも適応されることを考えると、かなりの利用頻度となる。(グラフ3)

さて、携帯メールであるが、小学生においては、半数は通話の方が多いが、メールの方が多という割合も34%と少なくない。中学生においては、85%がメールの方が多いと答えている。(グラフ4)

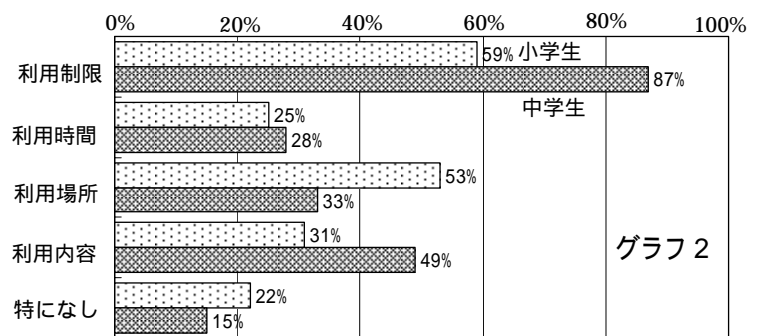
一日のメールについて、小学生の一番多い児童でも20通未満なのに対して、中学生ではほとんどなしの割合が3%と非常に少ない。一日51通以上やりとりする割合も14%となっている。(グラフ5)

メールをする相手は、小学生は親や親戚であり、あとは学校の友達が多い。ところが中学校になると様相はだいぶ異なってくる。さらに、男女で大きな差が現れてくることがわかった。(グラフ6)

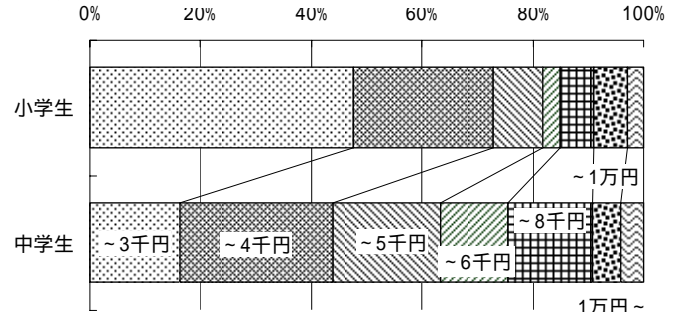
学年別・男女別携帯電話の所有率



携帯電話を持つにあたって子どもとした約束

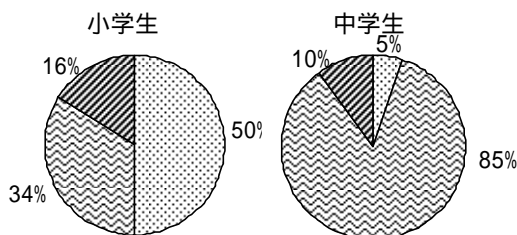


グラフ3 学校種別毎月の平均携帯電話利用料金



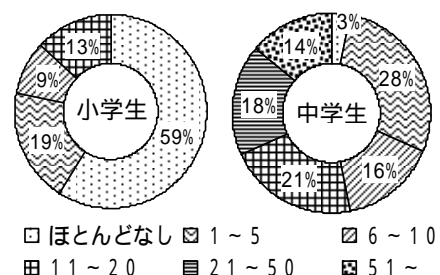
グラフ4

学校種別携帯電話とメールの利用回数の比較



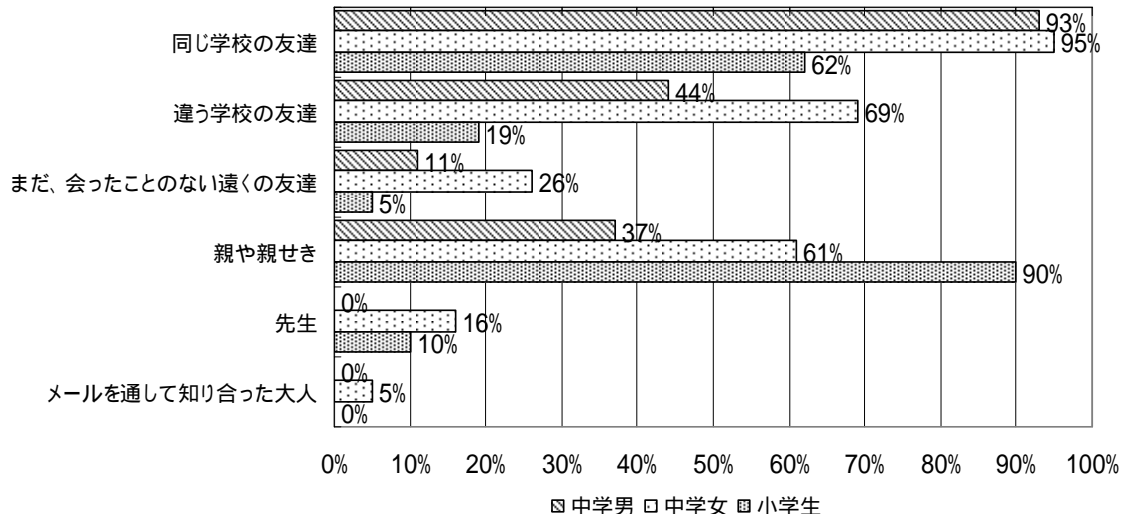
☐ 電話の方が多い ☑ メールの方が多い ▨ 同じくらい

グラフ5 学校種別一日の携帯メールの数



特に中学生の女子では、自校以外の学校の友達、全く会ったことのない遠くの友達、さらにメールを通して知り合った大人とのやりとりも割合が少ないがある。

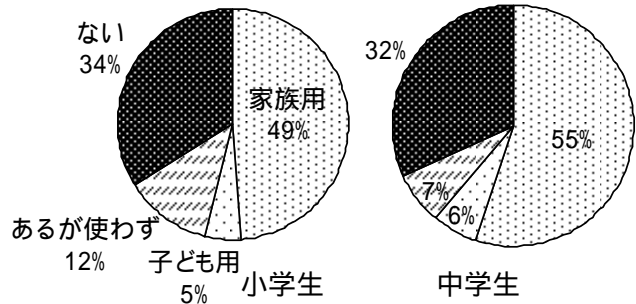
グラフ6 携帯メールの相手（複数回答）



2. パーソナルコンピュータ

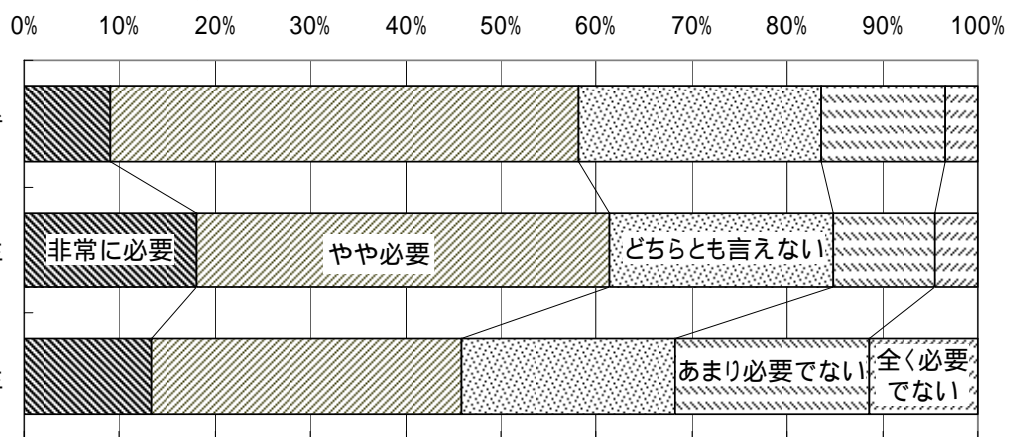
パソコンの所有率では、中学生の家庭の方がやや高いが、小学校の家庭においても半数を超えている。(グラフ7)またそのうち、インターネットに接続されているパソコンはいずれも7割を超えていた。パソコン購入の理由について一番多かったのが「親が使うのもともとあった」というのであり、親にとってもパソコンは市民権を得られつつあることがうかがえる。

グラフ7 校種別家庭のパソコン所有



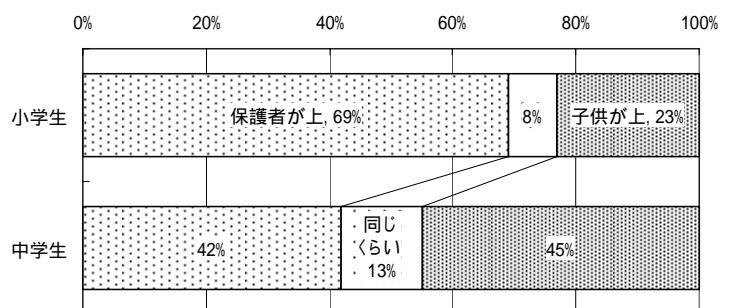
親及び子どもにとってのパソコン必要性の結果である。いずれも「非常に必要」、「やや必要」が、「あまり必要ではない」、「全く必要ではない」を大きく引き離している。(グラフ8)

グラフ8 家でのパソコンの必要性



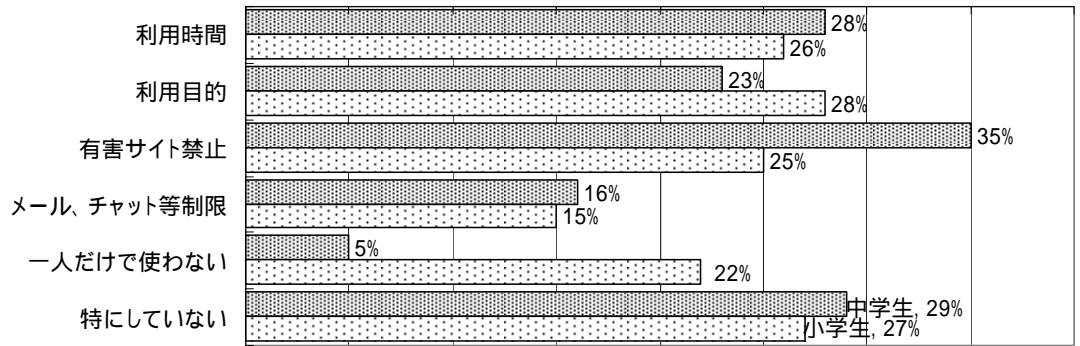
操作技能では、小学生では7割の保護者が親の方が操作技能において上であると答えているが、中学生になると保護者と子どもの割合が若干ではあるが逆転している。このことはそれだけ、子どもの技能の獲得が目ざましいということも意味することにもなる。(グラフ9)

グラフ9 パソコン操作技能の親子の比較



インターネット利用に関する約束では、2割から3割と高くはないが使い方の約束をしている。一方、小学生

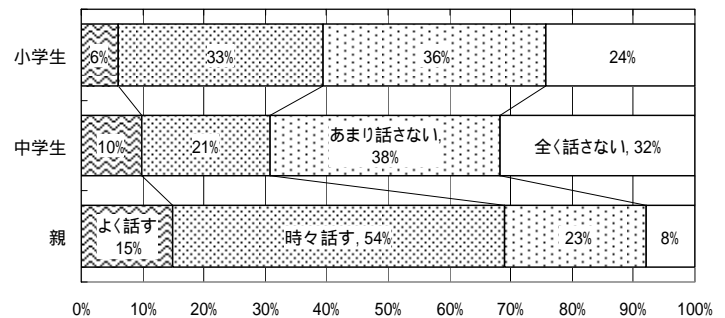
グラフ 10 家庭でのパソコン利用の約束



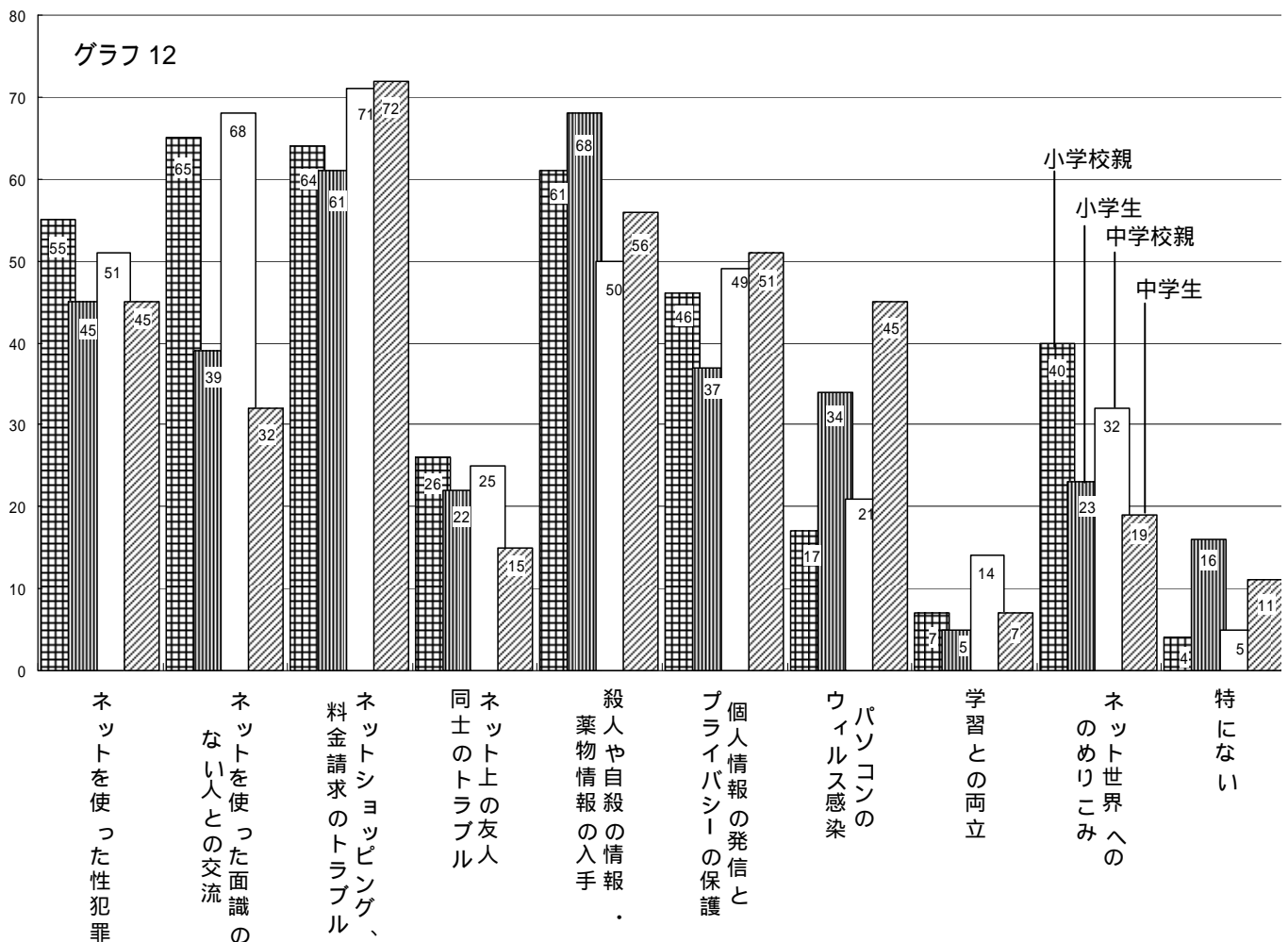
・中学生、いずれも3割が、特にインターネット利用に関しては約束をしていないということである。(グラフ 10)

グラフ 11 インターネット内容での家庭のコミュニケーション

ネットに関する親子のコミュニケーションでは、親は子どもとよく話しているのに対し、子どもはあまり親に話していないというねじれ現象が現れた。(グラフ 11)



### 3. 情報機器の発達に伴う心配事

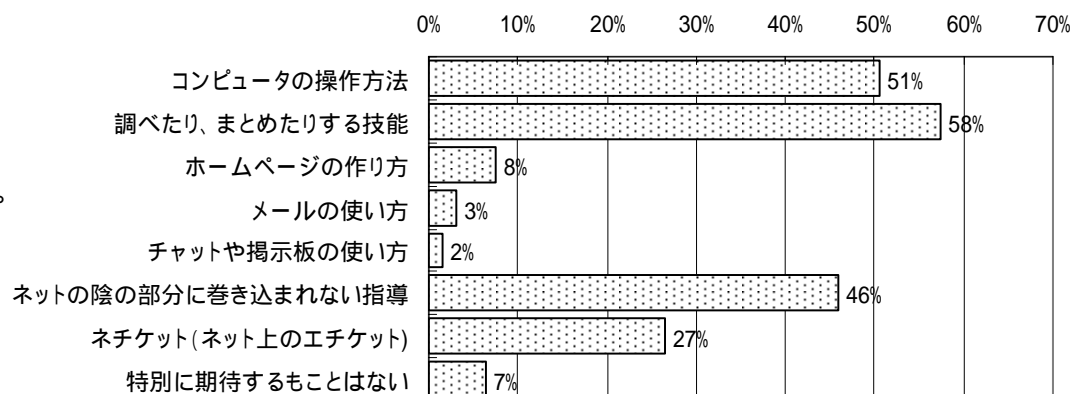


「ネットショッピングや料金請求のトラブル」、「殺人や自殺の情報・薬物情報の入手」では親も子どもも心配事としてあげている割合が高い。「ネットを使った面識のない人との交流」、「ネット世界へののめりこみ」では親の心配が子どもを大きく上回っている。逆に「パソコンのウィルス感染」では子どもの心配が親を上回っている。(グラフ 12)

#### 4. 学校に望む情報教育

「コンピューター操作」や「調べたり、まとめたりする技能」が半数を超えた。また、「ネットの影の部分...」、「ネチケツト」など、倫理的なもの、マナーなども期待されていることがわかった。(グラフ 13)

グラフ 13 親が学校に望む情報教育の内容



#### 5. 最後に

今回の調査の最後の自由記述の部分で、考えさせられることが多かった。たくさんのご意見をいただいたが、私は大きく3つにカテゴリー化してみた。1つは、ネットや携帯のしつけは、学校がすべきものではなく、家庭でおこなうものであるという考え、2つめは、学校で積極的に指導してほしいという考え、そして3つめが、学校と家庭が連携しながら情報に関する指導をすすめてほしいという考えである。

調査では、携帯やインターネットの子ども利用には一定の理解が見られた。しかしながらその中には、時代の流れであるから認めざるを得ないという考えも自由記述の中から垣間見られた。携帯やパソコンを使っている子どもたちが、それらがなかった時代の子どもたちと比べて本当に幸せなのかと尋ねられたら、多くの方は疑問をとらえるに違いないと思う。

私は、学校において情報教育を研究・推進、実践する者として、これからもその有効性を追及していきたい。ネットワークだからこそできる遠く離れた学校とのリアルタイムの交流、インターネットを使って自ら調べ、まとめ、それを発表していく実践力の育成、実際には見ることでできない、体験することの難しい事象のコンピュータシュミレーション...、情報機器を使っての可能性はこれからも大きく広がっていく。それと同時に、現実のネット社会には、子どもたちを陥れようとする危険がすぐ近くに潜んでいることもまた事実である。今回のアンケートで多くの方にご指摘いただいた情報社会の影の部分への対応も学校としては、実態を把握し、指導をしていきたい。

「情報革命」と言われる 200 年初頭に育ち、21 世紀のひのき舞台で活躍する子どもたちの育成のために、時代に合った教育を行い、ネットワーク社会で大きく羽ばたける人間の育成に力を尽くしていきたい。常にネットワークの向こうには温かな血の通う人間がいることを信じて。

七飯町立藤城小学校

教諭 佐々木 朗

asasaki@host.or.jp